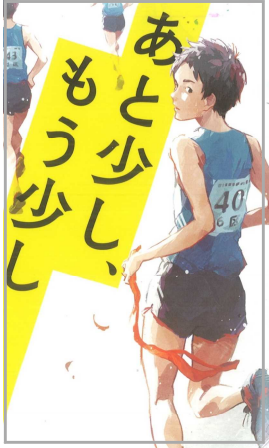


## 自分らしい走り 10月13日

中間テストを終えて、早朝の駅伝練習が再開されています。  
本番の市中駅伝大会は、来週21日の開催。  
男子は一人3kmの六区間、女子は一人2kmの五区間で  
津田中の襷をつなぎます。駅伝と言えば…  
瀬尾まいこさんの小説『あと少し、もう少し』を思い出します。



H24 新潮社刊行 新潮文庫装幀より

定期異動で顧問が替わってしまった田舎町の中学校の陸上部。  
残された3年生のキャプテンが、部員不足の中で、  
最後となる地区の駅伝大会と一緒に走ってもらう仲間を集め、  
新しい素人顧問の先生と県大会出場をめざすお話です。

六つの区間ごとに、6人の中学生ランナーそれぞれが、  
駅伝競技に参加するまでの自分の過去の歩みを振り返りながら、  
次の中継地点で襷を待っている仲間をめざして疾走します。  
物語も終盤にさしかかり、順位も気になり始めたあたり、  
先輩(キャプテン)にあこがれて陸上を始めた2年生部員(俊介)が、  
任された5区を走る場面があります。

俊介は、先輩(キャプテン)の走り方を頭に浮かべ、  
それをまねて走ろうとするのですが、  
一人二人と次々に抜かれ、順位を落としてしまいます。  
抜かれたショックなのか、ほどけない緊張のせいなのか、  
身体が縮まり、「先輩みたいになんて走れそうもない」  
と思った彼が、最後にたどり着いたのが右の心境です。

誰かのまねをしてうまく  
走れるわけがない。  
僕は何のために走ってる  
んだ。自分自身の走りを  
せずにどうする。  
5区は僕の区間だ。  
自分らしく走ろう。

この姿って、きっと中学生の皆さんなら誰しもが経験するものではないでしょうか。  
それは、部活動だったり、勉強だったり、他者との関わり方だったり、進路だったり…  
その人によって、とまどう場面やとまどう時期こそ違うけれど…

誰の場合にも、最初は、あこがれる理想があって、まねのできそうなモデルがあって、  
けれど、自分ではどうしても同じようには上手いかずに、焦りやいらだちが生まれてくる。  
そして、競い合っている友達や周りの人たちのことが気になって、また不安になる。  
そんな中から、苦しんで開き直って、やっと見つけ出す「自分らしさ」「自分の走り」

小説の次の場面では…

「自分の走り」を取り戻した俊介が、かつて先輩から掛けられた言葉を思い出します。

「動いてるものを目標にするから、走りにくいんだよ」

「たとえば、あの電柱を目指せばいいんだ。で、そこまで行けば、また次の電柱を目指す。そうやって少しずつクリアしていくうちにゴールできるよ。じゃあ、まずはあの電柱まで一緒に頑張ろう」

今、中学生を走る皆さんも、周りだけにとらわれず、自分らしく、次の目標に向かって少しずつ！  
学校長